岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第315集

日の出町Ⅰ遺跡発掘調査報告書

職員宿舎建設事業関連発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

日の出町Ⅰ遺跡発掘調査報告書

職員宿舎建設事業関連発掘調査

序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、10,000ヵ所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後生に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実もまた重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発の調和も今日的課題であり、当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、建設省三陸国道工事事務所職員宿舎新築工事に関連して、平成10年度に実施した日の出町Ⅰ遺跡の調査結果をまとめたものであります。この調査によって、縄文時代中期中葉～後葉の住居跡や土坑・炉跡などの遺構のほか、縄文時代早期から後期にかけての遺物が確認され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました三陸国道工事事務所・宮古市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成11年5月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　**船越昭治**

例　言

1．本報告書は、宮古市日の出町56番４号ほかに所在する、日の出町Ⅰ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、三陸国道職員宿舎新築工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会と建設省三陸国道工事事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．岩手県遺跡登録台帳に記載される遺跡番号・遺跡略号はＬＧ24－2003・ＨＤＭＩ－98である。

4．発掘調査期間は、平成10年４月８日～５月22日、発掘調査面積は1,300㎡である。室内整理期間は、平成10年11月２日～平成10年12月28日である。ともに濱田　宏・玉山健一が担当した。

5．本報告書の執筆は、Ⅰを中川重紀、Ⅱ４．を玉山、それ以外を濱田が担当し、編集は濱田と玉山が分担して行った。

6．出土した石器類の石質鑑定は、花崗岩研究会に依頼した。

7．本報告書作成にあたり、次の方々にご協力・ご指導いただいた。（敬称略・順不同）
日下和寿・柳沢忠明（岩手県立博物館）、竹下将男・高橋憲太郎・鎌田祐二（宮古市教育委員会）
千葉孝雄（鍬ヶ崎小学校）

8．野外調査では宮古市内の作業員20名、室内整理では当センターの期限付職員のご協力をいただいた。

9．土層の観察は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1989）によった。

10．遺跡内の基準点測量・基準杭の設置は、宮古市(株)鈴木測量設計に、空中写真撮影は(株)東邦航空に委託した。

11．調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターで保管・管理している。

目　次

序
例言

＜本　文＞

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……2
　1．遺跡の位置と地形……2
　2．遺跡の立地……2
　3．基本層序……2
　4．周辺の遺跡……4
Ⅲ　調査・整理の方法……7
　1．野外調査……7
　2．室内整理……7
Ⅳ　検出された遺構と遺構内出土遺物……9
　1．竪穴住居跡……9
　2．陥し穴……11
　3．土坑……11
　4．炉跡……12
　5．焼土……12
Ⅴ　遺構外出土遺物……13
　1．土器……13
　2．石器……14
　3．その他の遺物……14
Ⅵ　まとめ……23
　1．遺構・遺物……23
　2．おわりに……24

報告書抄録……39

＜図　版＞

図１　岩手県全図と遺跡の位置……１
図２　基本層序……２
図３　地形分類図……３
図４　周辺の遺跡……５・６
図５　遺構配置図……８
図６　遺構内出土遺物……９
図７　第１号住居跡……10
図８　第１号陥し穴・第１号土坑……11
図９　第１号炉跡・第１・２号焼土……12
図10　遺構外出土遺物（１）……15
図11　遺構外出土遺物（２）……16
図12　遺構外出土遺物（３）……17
図13　遺構外出土遺物（４）……18
図14　遺構外出土遺物（５）……19
図15　遺構外出土遺物（６）……20

＜表＞

表１　周辺の遺跡一覧……５・６
表２　第１号住居跡出土遺物観察表……９
表３　遺構外出土遺物観察表（土器）……21
表４　遺構外出土遺物観察表（石器）……22

＜写真図版＞

写真図版１　遺跡全景……27
写真図版２　第１号住居跡……28
写真図版３　陥し穴・土坑・炉跡……29
写真図版４　焼土・作業風景……30
写真図版５　遺構内・遺構外出土遺物（１）…31
写真図版６　遺構外出土遺物（２）……32
写真図版７　遺構外出土遺物（３）……33
写真図版８　遺構外出土遺物（４）……34
写真図版９　遺構外出土遺物（５）……35
写真図版10　遺構外出土遺物（６）……36
写真図版11　遺構外出土遺物（７）……37
写真図版12　遺構外出土遺物（８）……38

Ⅰ　調査に至る経過

日の出町Ⅰ遺跡の発掘調査は、建設省三陸国道工事事務所の「日の出宿舎新築工事」の施工に伴い実施されるものである。

「日の出宿舎新築工事」は、老朽化の著しい宿舎の改善を図るために、鉄筋コンクリート３階立（６戸）を新築するものであり、平成８～10年度の予定で用地買収及び工事を進めている。

工事予定箇所の用地については、平成８年度に買収したが、宮古市から紹介されたこともあり、当事務所としては埋蔵文化財包蔵地とは思わずにいたものである。

平成９年度になり、埋蔵文化財包蔵地であるとの指摘を受け、急遽平成９年11月25日付け建東陸調第68号「日の出宿舎新築工事に係わる埋蔵文化財の試掘調査について(依頼)」により、岩手県教育委員会に対し試掘調査を依頼した。同年12月１日に試掘調査を実施し、平成９年12月８日付け教文第736号「日の出宿舎新築工事に係わる埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により、埋蔵文化財が確認された旨の回答を受けた。

その後、現地立ち会いによりその範囲を確定し（埋蔵文化財分布範囲1,700㎡のうち、建設省用地1,050㎡＋借地予定250㎡＝発掘面積1,300㎡）平成９年12月26日付け建東陸調第80号「埋蔵文化財の発掘調査について」により、岩手県教育委員会経由、文化庁長官宛協議し、平成10年１月６日付け教文第７－221号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」により、発掘調査を実施することとなったものである。

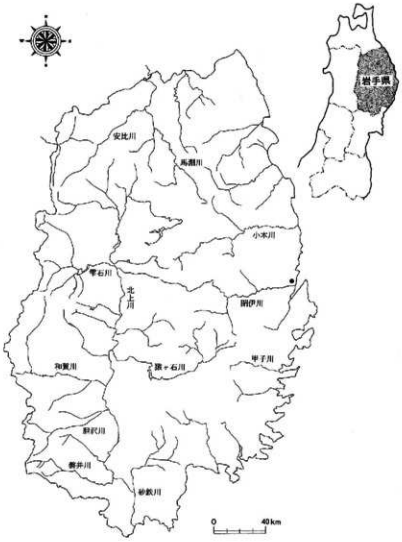


図１　岩手県全図と遺跡の位置

II　遺跡の立地と環境

1．遺跡の位置と地形

日の出町Ⅰ遺跡は、宮古市日の出町56番４、(株)東日本旅客鉄道山田線宮古駅の北北東約1.7kmの国道45号線南側にあり、宮古湾まで延びる丘陵裾の東向き緩斜面に立地する。遺跡の位置は、北緯39度39分18秒、東経141度57分13秒である。

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央にあって、北側で田老町・岩泉町、西側で新里村、南側で山田町と接し、東側には太平洋を臨む。その太平洋に向かって北東に突き出す重茂半島の毗ヶ崎は、本州最東端に位置している。宮古市周辺の海岸には、浄土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は、宮古市を境としてその北部と南部では様相が異なっている。南部が典型的なリアス式海岸であるのに対して、北部は海岸段丘の発達した比較的入り組みの少ない隆起性の海岸となる。また、後者の中でも田野畑村と普代村にまたがる北山崎周辺は、100mを越える海蝕崖が続いている箇所である。三陸海岸一帯は、山地が海岸直前まで迫っており、低地は河川流域の狭小な範囲に限定される傾向が認められる。宮古市内を流れる河川は、盛岡市と川井村の境にある区界峠付近に端を発する閉伊川、その支流である近内川・山口川・長沢川、宮古湾に注ぐ津軽石川、磯鶏海岸に流れ込む八木沢川などがある。前述のとおり、市内の低地は、これらの河川流域に沿って狭く帯状に広がっている。丘陵地は、この低地周辺や海岸に沿ってみられ、閉伊川の北側では板屋付近から帯状に、南側では長沢川との合流地点や磯鶏西側の低地と山地の間に分布する。海岸付近では、山地間に帯状に延びている。山地は、丘陵地の背後に起伏量の比較的少ない小起伏あるいは中起伏山地となって広がるが、標高300m前後の低い山地である。低平地の少ない宮古市では、このような丘陵地や山地の一部が大きく地形改変を受けている地区が多いが、近年はさらに宅地造成等の開発が進み、人工改変地が増えているようである。

2．遺跡の立地

日の出町Ⅰ遺跡は、標高310mほどの黒森山から宮古湾まで続く丘陵の東向きの緩斜面にあり、高く盛り土され建設された国道45号線によって遺跡北側を遮られている。このため遺跡の斜面下側では、雨水等の抜けが悪くなり、沼地となっていた。国道との比高は３～10mを測り、遺跡全体を国道側から見ると、擂鉢状に凹んで見える。国道45号線の北側には、山を切り崩して作られた佐原団地があるが、団地を外れさらに海側に向かうと、道路沿いに深い谷があらわれ、かなりの急崖になっている。

調査区内の地形は、西端が人工改変された平場となっており、そこから東側に一段下がり緩い東向き斜面となる。南側は西端の改変地から続く東向きの緩斜面である。既述のとおり東端は沼地となっているが、遺構・遺物はともに確認されなかった。遺跡の調査前の状況は荒地で、水を好む樹木が生い茂っていた。

遺跡の標高は、94～102.5mで、調査区内で約８mの比高差がある。

3．基本層序

調査区内では、基本的に図２のような土層が観察される。以下、表土から順に層序を示す。

＜第Ⅰ層＞　黒褐色土（10ＹＲ２／３）　シルト

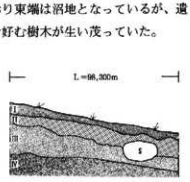


図２　基本層序

現在の表土で、調査区東側以外を被う。草木根を多く含み締まる。層厚10～30cm。

＜第Ⅱ層＞　黒褐色土（10ＹＲ３／２）　粘土質シルト

金雲母・長石粒・石英粒を含む。古代の層準。層厚10～25cm。

＜第Ⅲ層＞　黒褐色土（10ＹＲ２／２）　粘土質シルト

縄文時代の遺物包含層で、部分的に姶良火山灰の極小ブロックを含む。層厚10～50cm。

＜第Ⅳ層＞　暗褐色土（10ＹＲ３／３）　砂質土

風化花崗岩層で、通称マサ土。乾燥すると灰白色を呈する。層厚不明。

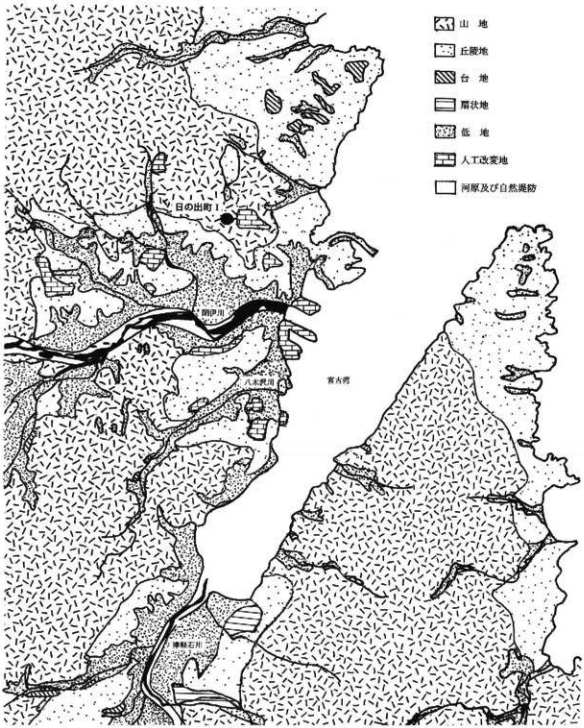


図３　地形分類図

4．周辺の遺跡

宮古市内には、縄文時代から近世まで450カ所以上の遺跡が確認されている。中でも、縄文時代と古代という複合遺跡が多く存在する。図4には閉伊川流域、宮古湾西岸～東岸および重茂半島周辺に所在する代表的な遺跡の分布を示し、表1にその内容を記した。

本遺跡では縄文時代・古代の遺物が出土しているが、縄文時代前期～中期の遺物が中心となるため、ここでは縄文時代の遺跡を中心に記述する。その前に弥生時代の遺跡について簡単に述べておく。弥生時代の遺構・遺物は、大付貝塚・セネガ沢・近内中村・柵館Ⅲ・小山根・長根Ⅰ・青猿Ⅱ・早坂・上村貝塚・根井沢・小堀内Ⅰ・荷竹米山Ⅰ等の遺跡で確認されているが、弥生時代単独のものはなく、縄文時代と古代との複合遺跡が約3分の2を占めている。

図4には示していないが、市内北部の小本丘陵（海岸段丘）上には平成8年に国指定史跡となった崎山貝塚のほか、トロノ木Ⅰ・鍬ヶ崎館山貝塚・わたのは、縄文時代晩期の人骨が出土した大付貝塚等の遺跡が存在する。

閉伊川流域周辺では、山口駒込Ⅰ・小沢貝塚・泉町狐崎Ⅱ、縄文時代中期の人骨が出土した八木沢丘陵上にある上村貝塚・磯鶏蝦夷森貝塚、後期後葉の巻貝形の土器が出土した近内中村遺跡や、岩船・菅ノ沢・隠里Ⅰ～Ⅳ・青猿Ⅰ・仏沢Ⅱ等の遺跡がある。また岩船・菅ノ沢・隠里Ⅰ、Ⅱ・仏沢Ⅱ・磯鶏館山遺跡ではフイゴの羽口や鉄滓が、青猿Ⅰでは製鉄炉が出土し、製鉄に関係する遺跡と思われる。本遺跡においてもごく少量ではあるがフイゴの羽口や鉄滓が出土している。

宮古湾西岸～東岸では八木沢丘陵に連続した小起伏山地上にある金浜Ⅲ、豊間根丘陵上にある沼里・藤畑・小堀内Ⅰ、山麓地傾斜面ないし線状地形にある赤前Ⅲ・赤前Ⅳ八枚田等の遺跡も縄文時代の単独のものではなく、古代との複合遺跡である。赤前Ⅲ・赤前Ⅳ八枚田・根井沢・大谷地Ⅱ・馬越Ⅰ・荷竹日向Ⅱ遺跡ではフイゴの羽口や鉄滓が出土している。

重茂半島はそのほとんどが山地帯で、半島全体としては縄文時代の遺跡が大半であるが、比較的開けた鮫ヶ崎丘陵上には中世城館である重茂館が存在する。追切・大稗Ⅱ・鵜鷲・荒巻Ⅰ・小角柄Ⅰ・音部谷地頭Ⅱ・麦生野Ⅱ・千鶏・石浜Ⅰ・川代Ⅱ等の遺跡は、縄文時代単独の遺跡で前期～中期の時期が中心となっている。また、赤なしが沢遺跡からは繊維を含まない前期後半～中期の土器や、ホオジロザメ歯製垂飾品が出土している。

＜引用・参考文献＞

岩手県企画開発室　（1973）：『北上山地開発地域土地分類基本調査（宮古）』

小田野哲憲・高橋義介（1991）：『上村貝塚発掘調査報告書』岩埋文報告書第158集(財)岩文振

光井文行・玉川英喜　（1990）：『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第146集(財)岩文振

宮古市教育委員会　（1994）：『崎山遺跡群Ⅲ』宮古市埋蔵文化財調査報告書41

宮古市教育委員会　（1995）：『磯鶏館山遺跡発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書43

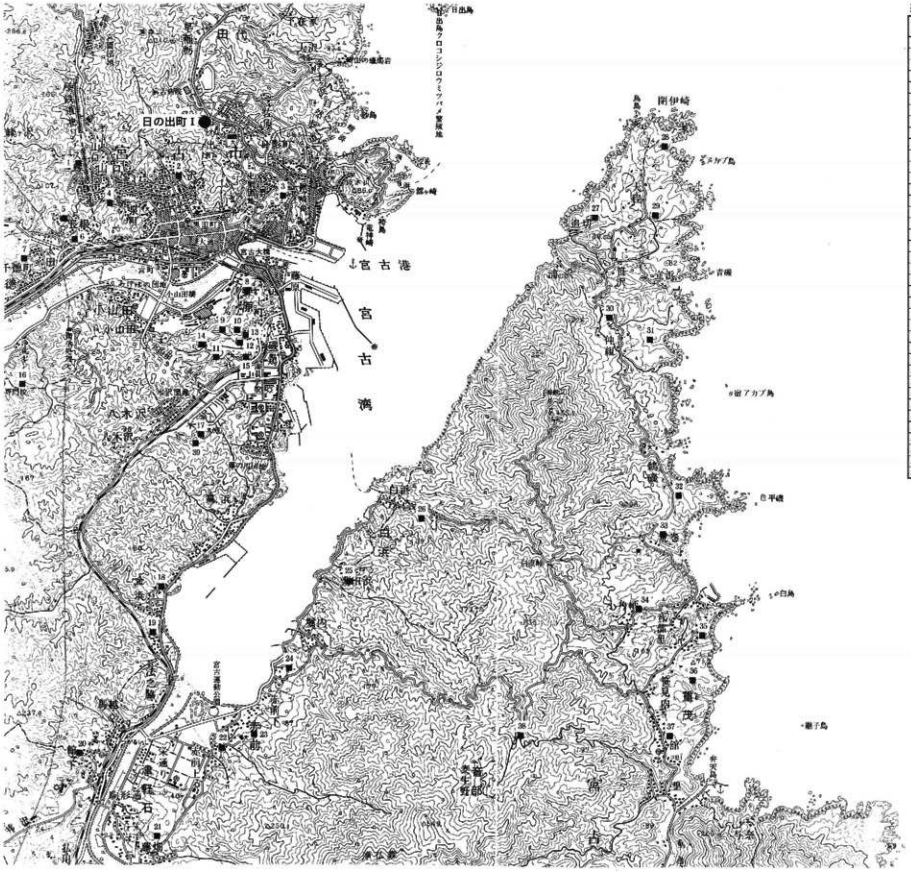


図4　周辺の遺跡

表1　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
1	山口駒込Ⅰ	集落跡	縄文・奈良	縄文土器・土師器・須恵器
2	小沢貝塚	貝塚	縄文	縄文土器・貝殻
3	小山根	散布地	縄文・弥生・古代	縄文土器・弥生土器・土師器
4	泉町鍋崎Ⅱ	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器・土師器・竪穴住居跡
5	青柳Ⅱ	集落跡	弥生・平安	弥生土器・土師器・竪穴住居跡
6	長根Ⅰ	群集墳	弥生～中世	古墳・鍛冶刀・直刀・和同開珎・土師
7	千徳城	城館跡	奈良・平安・中世	主郭・二の郭・三の郭・碧・空堀
8	藤原上町Ⅱ	集落跡	奈良	竪穴住居跡
9	小沢田貝塚	貝塚	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器・貝層
10	早坂	貝塚	縄文・弥生・古代	縄文土器・土師器・須恵器・貝層
11	上村Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器
12	上村Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器
13	上村貝塚	集落跡・貝塚	縄文～平安	竪穴住居跡・貝層
14	上村Ⅳ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器
15	磯鶏細寄貝塚	貝塚	縄文・古代	縄文土器・土師器・人骨・骨角器
16	大地田沢	集落跡	古代	竪穴住居跡
17	島田	集落跡	平安	竪穴住居跡・鉄・自然遺物
18	高浜野地神	散布地	縄文	縄文土器(中期)
19	金浜田	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器
20	沼奥	集落跡	縄文・奈良	縄文土器・土師器・竪穴住居跡
21	藤畑	集落跡	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器
22	赤前田	集落跡	縄文・平安	縄文土器・竪穴住居跡・羽口・鉄滓
23	赤前Ⅳ八枚田	集落跡	縄文・平安	縄文土器・竪穴住居跡・羽口・鉄滓
24	小堀内Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・奈良	縄文土器・弥生土器・土師器・石皿
25	白浜大田浜Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器
26	白浜Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後期)
27	迫切	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)
28	大浜Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
29	大浜Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)
30	魚なしが沢	集落跡	縄文	縄文土器・ホホジロザメ歯製垂飾
31	仲組Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器
32	鵜磯	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)
33	荒巻Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(早・前・中期)
34	小角野Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(前・中期)
35	音部谷地頭Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)
36	電見内Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
37	重茂館(館)	集落跡・城館跡	縄文・中世	縄文土器・主郭・二の郭・機構・碧・空堀
38	東杉野Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)
39	島田Ⅱ	集落跡	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器・羽口・鉄滓

Ⅲ　調査・整理の方法

1．野外調査

（1）調査区の設定

調査区の東西方向は、ほぼ国道45号線に平行しており、また地形の傾斜もほぼこれに沿っていることから、平面直角座標第X系を使用した。東西方向に２点の３級基準点を設定し、それを基にグリッドを区画した。基準点１・２の成果値は以下のとおりである。

基準点１　X＝－38020.000m　Y＝96445.000m　H＝97.367m

基準点２　X＝－38020.000m　Y＝96460.000m　H＝95.688m

なお、調査区内には上記の３級基準点２点のほか、補点を５カ所に設置しているが、成果値は省略する。

グリッドは、起点を南西に置き５×５mを１区画とした。南北方向は、南から算用数字の１から８まで、東西方向は、西からアルファベットのＡからＫまでを与え、その組み合わせによってグリット名とした。

（例…Ａ１区・Ｂ２区など）

（2）粗掘・遺構検出

調査はまず雑物の除去後に、県教育委員会文化課が実施した試掘トレンチの位置確認とクリーニングを行った。その後、層序・遺構の有無・遺物の出土状況を確認する目的で、２m幅のトレンチを傾斜に沿って数本設定した。粗掘については、それらのトレンチを広げる形で進めたが、ほとんどは人力によって行い、重機の使用は無遺物地点の表土剥ぎや、廃土の切り替えしなど最小限に止めた。

遺構の検出は、Ⅱ層（古代面）上面、Ⅲ層（縄文時代の遺物包含層）およびⅣ層（縄文中期以前）の３面で行った。地点によってはⅡ層を欠いている部分もある。

（3）遺構名の付け方

検出された遺構は、その属するグリット名を付して、例えばＡ１住居跡・Ｂ２土坑と呼称したが、整理の段階で第１号住居跡・第２号土坑などと、遺構毎の連番になるように遺構名を変更している。

（4）精査・実測

土坑類は２分法で精査した。実測は簡易遣り方で行い、遺構の平・断面図は、20分の１の縮尺を基本とし、炉跡・焼土の断面は必要に応じて10分の１とした。

（5）写真撮影

野外での写真撮影は、35mm版２台（モノクローム・カラーリバーサル１台ずつ）と６×７cm版モノクロームを使用した。また、メモ用にポラロイドカメラも使用し、フィールド・カードに貼付した。調査終了直前には、セスナ機による空中写真撮影を行った。

2．室内整理

（1）遺物の処理

遺物は、野外調査と並行して雨天時などに水洗まで行い、その後室内で注記・接合・復元の順に進めた。土器類は報告書掲載用のものを選別後、登録作業・実測・拓本・写真撮影・トレースを行い、遺物図版を作成した。石器類は器種毎に登録し、土器類と同様に進めた。

（2）遺構図面

野外調査で得られた図面類は、標高等の確認・平断面図の点検をし、必要に応じて合成した。その後トレース・遺構図版作成の順に進めた。

（3）図版について

遺物の図版は遺構種別毎に作成し、遺構外出土のものは本報告書による分類基準によってまとめて掲載した。縮尺は、土器実測図・拓影図が3分の1、剥片石器は3分の2、礫石器は3分の1で、石製品・鉄製品は2分の1である。また、各図版内にはそれぞれスケールを付している。

遺構図版は、遺構の種類毎に掲載した。縮尺は、炉跡のみ20分の1で、他は40分の1である。

（4）遺物写真図版について

遺物写真図版の縮尺は、剥片石器3分の2、礫石器3分の1、土器の立体が4分の1、土器破片3分の1・3分の2、石製品・鉄製品は2分の1を原則とした。なお、一部にこの縮尺に合わないものがある。

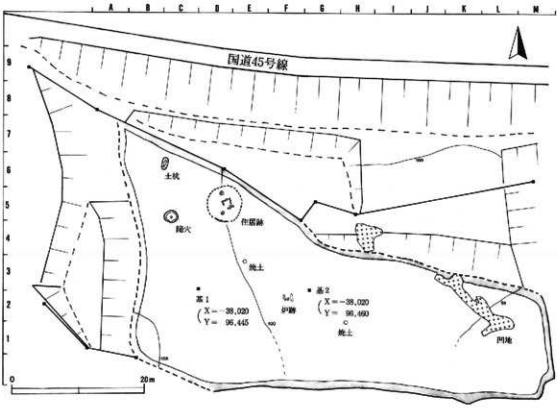


図5　遺構配置図

表2　第1号住居跡出土遺物観察表

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	分類	図版	写真図版
1	E5住炉周辺	深鉢	胴部	微隆帯、合わせ目に突起、LR縄文、金雲母	ミガキ	Ⅲ1	6	5
2	E5住炉内	深鉢	口縁部	突起、刺突、指頭押しつけ	ナデ	Ⅲ1	6	5
3	E5住　土器1	深鉢	口～胴	波状口縁（渦巻）、口唇部由形隆帯貼り付け、渦巻文、RL縄文	ミガキ	Ⅲ1	6	5
4	E5住　土器2	深鉢	胴部	平行沈線、弧状沈線、LR縄文	ナデ	Ⅲ1	6	5
5	E5住	深鉢	口～胴	突起、指頭つまみ出しによる隆帯、弧状沈線、LR縄文	ナデ	Ⅲ1	6	5

Ⅳ　検出された遺構と遺構内出土遺物

1．竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡

遺構（図７、写真図版２）

＜位置・重複＞Ｄ５区・Ｅ５区にあり、他の遺構との重複は認められない。

＜規模・平面形＞全体規模は不明であるが、炉や柱穴配置から直径４～５ｍほどと思われる。

＜埋土＞炉の検出により床面を確認したため不明である。

＜床面＞Ⅳ層上面を床面とする。ほぼ平坦であるが、北側は緩く傾斜している。

＜柱穴＞ＰＰ１～５の５個の柱穴が検出された。主柱穴はＰＰ１・２で、深さは28㎝・41㎝である。ＰＰ３～５はＰＰ２の周辺で検出されたものである。

＜炉＞一辺が約80㎝の方形の石囲炉で、コの字形に７個の礫が配される。燃焼部焼土は、幅30㎝ほどの不定形を呈し、最大で厚さは10㎝である。焼成は良好である。

＜その他＞炉の南側１ｍ付近から、縦長の石製垂飾品が出土したが、本遺構に伴うかは不明である。

遺物（図６、写真図版５）

＜出土状況＞本遺構の検出状況から、遺物を包含層の一部としてグリットで取り上げてしまっていたが、検討した結果、周辺から出土した復元個体２点（３・４）は本遺構に伴うものと思われた。

＜土器＞１～５の５点掲載したが、いずれも中期中葉（分類－Ⅲ群１類）のものである。１は炉の周辺から、２は炉内の覆土から出土している。観察表は、８ページ下表２に示した。

時期　検出された炉の形態や出土遺物から、縄文時代中期中葉と考えられる。

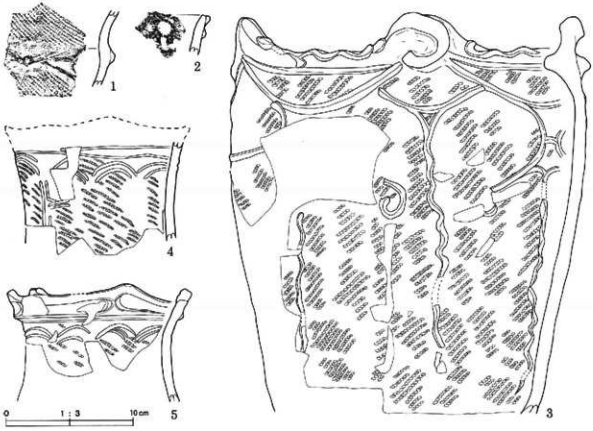
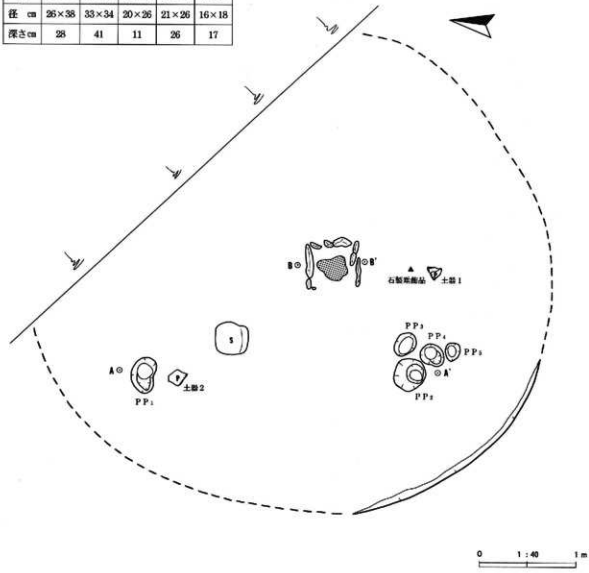


図６　遺構内出土遺物（第１号住居跡）

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5
径 cm	26×38	33×34	20×26	21×26	16×18
深さcm	28	41	11	26	17



第1号住居跡(E5区)

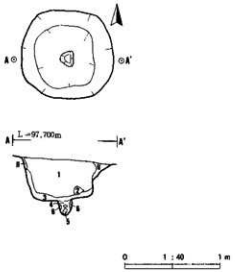
A－A'

1. 10YR2／2　黒褐色　粘土質シルト　黄褐色シルト・炭化物粒を含む
2. 10YR2／1　黒色　粘土　粘性強い
3. 10YR3／3　暗褐色　シルト　雲母を含む柱の掘り方埋土

B－B'

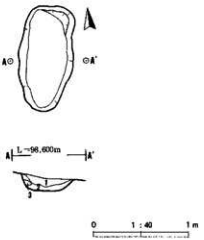
1. 10YR3／2　黒褐色　シルト　炭化物粒をまばらに含む
2. 10YR3／1　黒褐色　シルト　ブロック状
3. 7.5YR3／3　暗褐色　シルト　焼土粒・炭化物粒を含む
4. 2.5YR4／8　赤褐色　シルト　焼成不良の焼焼部焼土

図7　第1号住居跡



第１号陥し穴(Ｃ５区)

1．10ＹＲ２／２　黒褐色　粘土質シルト　雲母・風化花崗岩粒を含む
2．10ＹＲ３／３　暗褐色　粘土質シルト　雲母を含むブロック
3．10ＹＲ３／２　黒褐色　粘土質シルト　Ⅳ層崩落土
4．10ＹＲ２／２　黒褐色　粘土　雲母を含む
5．10ＹＲ４／４　褐色　砂質シルト　雲母を含む
6．10ＹＲ３／２　黒褐色　シルト　掘り方



第１号土坑(Ｃ７区)

1．10ＹＲ３／２　黒褐色　シルト　金雲母を含む
2．10ＹＲ２／２　黒褐色　粘土質シルト　黄褐色土小ブロックを含む
3．10ＹＲ４／４　褐色　シルト　地山崩落土

図８　第１号陥し穴・第１号土坑

２．陥し穴

第１号陥し穴

遺構（図８、写真図版３）

＜位置＞調査区北西隅のＣ５区にある。

＜検出面＞第Ⅲ層。

＜規模・平面形＞開口部径93×96㎝、底部径61×64㎝、深さ45㎝の隅丸方形。

＜埋土＞黒褐色土主体で暗褐色の小ブロックを含み、壁際から底部にかけてⅣ層の崩落土が堆積している。

＜底面＞平坦で、中央部に副穴を１個有する。それの底面からの深さは16㎝である。

＜出土遺物＞出土していない。

＜その他＞副穴が見られたことから、陥し穴と判断した。

＜時期＞検出状況から縄文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

３．土坑

第１号土坑

遺構（図８、写真図版３）

＜位置＞調査区北西部Ｃ７区にある。

＜検出面＞第Ⅳ層上面。

＜規模・平面形＞開口部径80×114㎝、底部径42×103㎝、深さ16㎝の不整楕円形。

＜埋土＞金雲母を含む黒褐色土主体で、暗褐色の地山崩落土小ブロックが混入している。

＜底部＞ほぼ平坦である。

＜出土遺物＞出土していない。

＜時期＞検出面から、縄文時代早期に属する可能性がある。

4．炉跡

第１号炉跡

遺構（図９、写真図版３）

＜位置＞調査区中央部Ｆ２区にある。

＜検出面＞調査区中央部の南北方向に残した幅80cmの土層観察用ベルトの中に検出された。層位は第Ⅲ層上面である。

＜規模・種類＞大小４つの礫からなり、40×55cmの規模を持つ。北西側の礫を欠くが、抜き取り痕は確認されなかった。コの字形の石囲炉と思われる。

＜焼土＞厚さ８cm程度の不整形の焼土が確認された。焼成はあまり良くない。

＜出土遺物＞出土していない。

＜その他＞既述した検出状況のため、炉単体の精査を行ったのみで、柱穴等の確認もできなかった。

＜時期＞第１号住居跡の炉の形態と似ていることから、縄文時代中期中葉の可能性が高い。

5．焼土

第１号焼土

遺構（図９、写真図版４）

＜位置＞調査区中央部Ｅ３区にある。

＜検出面＞第Ⅲ層上面

＜規模・形状＞58×65cmの不整形。

＜焼土＞厚さ９cmで、焼成良好。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞検出面から縄文時代と思われるが、詳細は不明である。

第２号焼土

遺構（図９、写真図版４）

＜位置＞調査区中央部Ｈ２区にある。

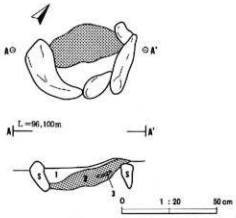
＜検出面＞第Ⅲ層上面

＜規模・形状＞３ブロックからなる不整形

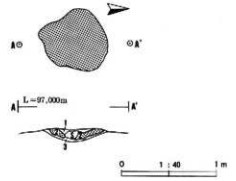
＜焼土＞厚さ数cmで、いずれも焼成不良。

＜出土遺物＞なし

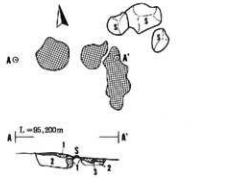
＜時期＞検出面から縄文時代と思われるが、詳細は不明である。



第１号炉跡（Ｆ２区）
1．10ＹＲ２／２　黒褐色　シルト　焼土粒・炭化物粒を僅かに含む
2．５ＹＲ４／６　赤褐色　シルト　焼成不良の焼土
3．５ＹＲ４／６　赤褐色　シルト　赤味の強い部分



第１号焼土（Ｅ３区）
1．10ＹＲ３／２　黒褐色　シルト　焼土粒・炭化物粒を含む
2．５ＹＲ５／８　明赤褐色　シルト　焼成良好で炭化物粒を含む
3．10ＹＲ３／２　黒褐色　シルト　焼土粒を僅かに含む



第２号焼土（Ｈ２区）
1．10ＹＲ３／３　暗褐色　シルト　焼成部焼土で焼成は良くない
2．10ＹＲ２／２　黒褐色　粘土　焼土粒をまばらに含む
3．５ＹＲ３／３　暗赤褐色　シルト　ブロック状の焼土

図９　第１号炉跡・第１・２号焼土

V　遺構外出土遺物

1．土器（図10・11、写真図版5～9）

今回の調査で遺構外から出土した土器の総量は、大コンテナ(42×32×30cm）1箱弱で、そのほとんどは第Ⅲ層中から出土している。時期は、縄文時代早期後葉・前期初頭～前葉・中期中葉～後葉・後期などで、主体は前期前葉および中期中葉～後葉のものである。ここでは、従来の土器編年に則って分類を試みる。

＜第Ⅰ群土器＞（遺物番号6～13）

縄文時代早期に属する一群で、大きくは後葉のムシリ5式に、八戸市売場遺跡の分類では、売場第Ⅵ・Ⅶ群の一部に比定されよう。本群の土器の胎土にはいずれも金雲母・細かい砂粒を含み、焼成は概ね良好である。6～12は、いずれも器面の表裏に条痕文が施されるが、刻みのある微隆帯があるもの（6・7・8）、山形の沈線を有するもの（9）、沈線によって幾何学状の文様に見えるもの（10・11）、条痕のみのもの（12）がある。6・8は同一個体で、隆帯上に連続する刻みが明瞭である。7ははっきりしないが、そのような痕跡が観察される。13は太い沈線の末端がV字状に集まる、いわゆる集合沈線文（矢羽状沈線文）であろう。内面には条痕文は観察されない。この13のみ、売場第Ⅶ群に相当するものか。

＜第Ⅱ群土器＞（14～35）

縄文時代前期初頭～前葉に属する一群で、概ね東北北半の長七谷地Ⅲ群～早稲田6類の時期に相当するものと思われる。いずれも胎土には植物繊維を多く含み、厚手のものが多い。羽状縄文が施されるもの（1類－14～19）、組縄縄文（いわゆるピッチリ縄文）が施されるもの（2類－20～30）、単節の斜行縄文のみが施されているもの（3類－31～34）、無文のもの（4類－35）に細分した。1類では、14のみ結束された原体？が用いられているが、本類にそれが少ないことや17の底部の特徴から、宮城県塩竈市桂島貝塚出土のものに類似しているようである。2類では、20・29・30が複節の組縄縄文と思われるが、まだこの他にも複節のものがあるかもしれない。滝沢村仏沢Ⅲ遺跡では、組縄縄文の時期を早稲田6類c相当としているが、本群2類もそれに比定されるものとしておきたい。

＜第Ⅲ群土器＞（36～55）

縄文時代中期中葉～末葉に属する一群で、大木7b式～10式に相当する。口縁部周辺に撚紐圧痕・粘土紐の貼付・隆帯・沈線・刺突等が施されるものを1類、沈線による区画文と地文の充填が見られるものを2類とした。さらに1類では、口縁部の文様が横位の撚紐圧痕が主体のもの（a類　36～42）、同じく沈線や刺突が主体のもの（b類－43～48）、同じく隆帯や粘土紐の貼付が主体のもの（c類－49・50）に細分した。各類とも大木7b～8a式に比定されるが、b類の44・45は口縁部文様の特徴から、大木7a式に相当する可能性がある。また48をこの群に入れた積極的な根拠はなく、時期が全く違うものかもしれない。2類では、沈線で区画を設けた後、文様内に地文を充填しそれが縦に展開するもの（a類－51・52）、区画された文様の外側に地文を充填するもの（b類－53～55）に細分した。a類は大木9式、b類は大木10式に比定される。

＜第Ⅳ群土器＞（56～59）

縄文時代後期に属する一群で4点出土したのみである。56・57は連続する刻目列が特徴的であり、宮城県田柄貝塚第Ⅲ群土器に比定されるものである。58は無文で、内面にコゲが付着する。59は胎土に植物繊維を含まない羽状縄文である。

＜第Ⅴ群土器＞（60～62）

縄文時代後期または晩期に属すると思われるが、詳細な時期が不明なものである。いずれも平行する沈線が特徴であるが、60は沈線下に文様が縦方向に展開していくようである。

＜第Ⅵ群土器＞（63～76）

植物繊維を含まないが、時期を特定できない粗製土器を一括した。原体には単節と複節がある。前期後半～後期のいずれかの時期に属するものと思われる。

2．石器（図12～15、写真図版10～12）

遺構外から出土した石器類の総点数はおよそ100点であるが、ここではフレイク・チップ類を除いた30点を掲載した。これらは、第Ⅲ層を中心に出土しているが、表土や第Ⅱ層中からも若干出土している。

剥片石器では、77～80は石鏃で、77・78は凹基、79が凸基、80が平基鏃である。79の基部にはアスファルトが表裏に付着している。81は縦長の石匙、82～86は不定形石器である。刃部加工は、82以外はいずれも不明瞭である。86は水晶を素材としているが、他に10点あまり水晶の剥片が出土している。

礫石器では、87は刃部の残る石斧の欠損品、88・89は凹石、90は敲石である。91～102は磨石で、99のみ4面に磨面が観察される。103・104は石皿の欠損品、105は台石とした。104・105は浄土ヶ浜産の素材を用いている。106は滑石製の垂飾品で、長さ5.7㎝、幅1.1㎝を計る。全体が丁寧に磨かれ、片側からのみ穿孔されている。

3．その他の遺物（図15、写真図版12）

土器・石器類以外では、掲載したフイゴの羽口（107）・椀形滓（108）・鉄釘（109・110）・近世陶磁器（111～115）などが出土した。107は羽口の先端部で、器面は熱のためひび割れて脆い。108は鍛冶滓と思われる。109・110は時期不明であるが、ともに断面は角型を呈している。陶磁器は、111は瀬戸・美濃系の馬目皿、112は京焼・信楽系の碗、113・114は伊万里Ⅳ期の碗、115は紅皿である。なお、陶磁器は写真のみ掲載した。

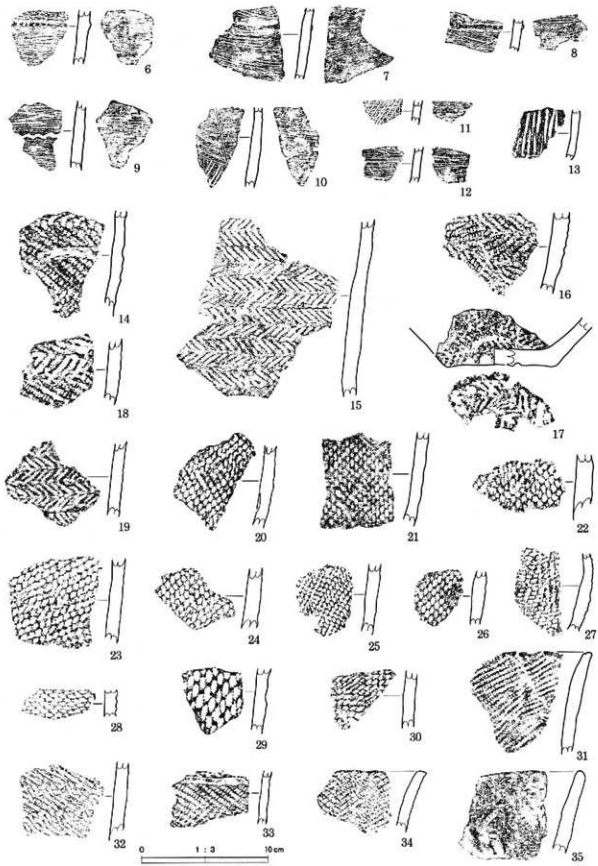


図10　遺構外出土遺物(1)

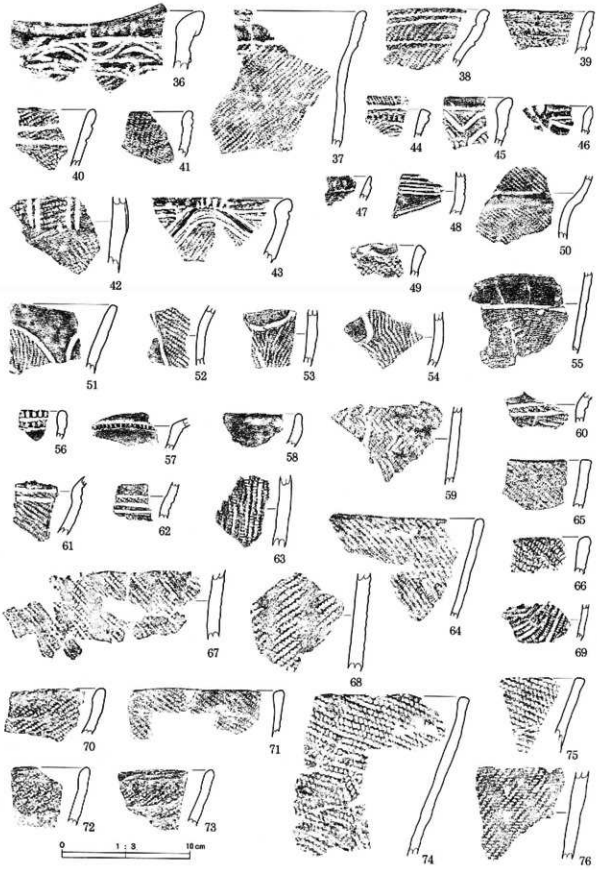


図11　遺構外出土遺物(2)

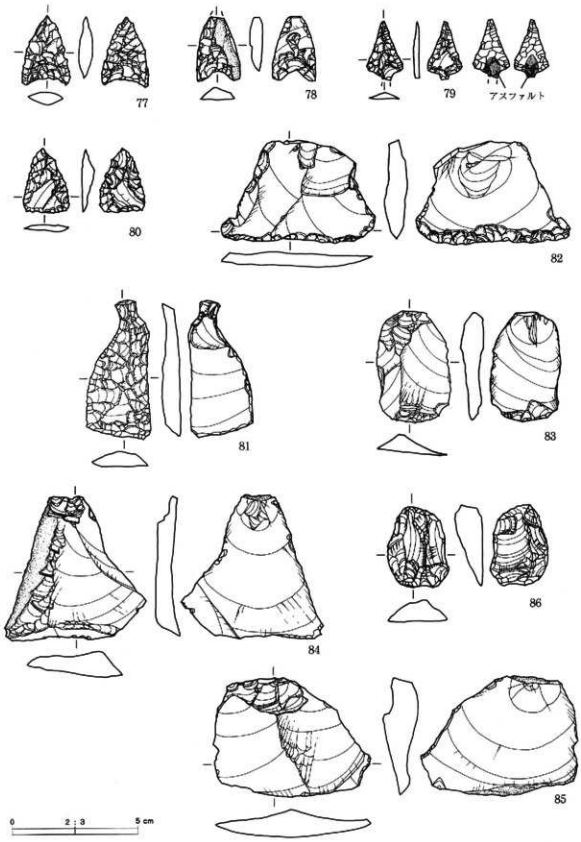


図12　遺構外出土遺物(3)

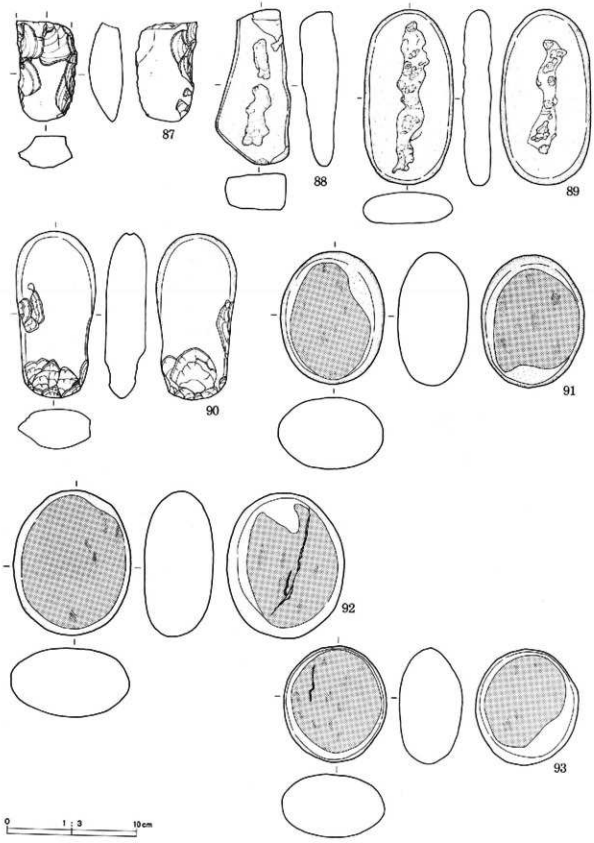


図13　遺構外出土遺物(4)

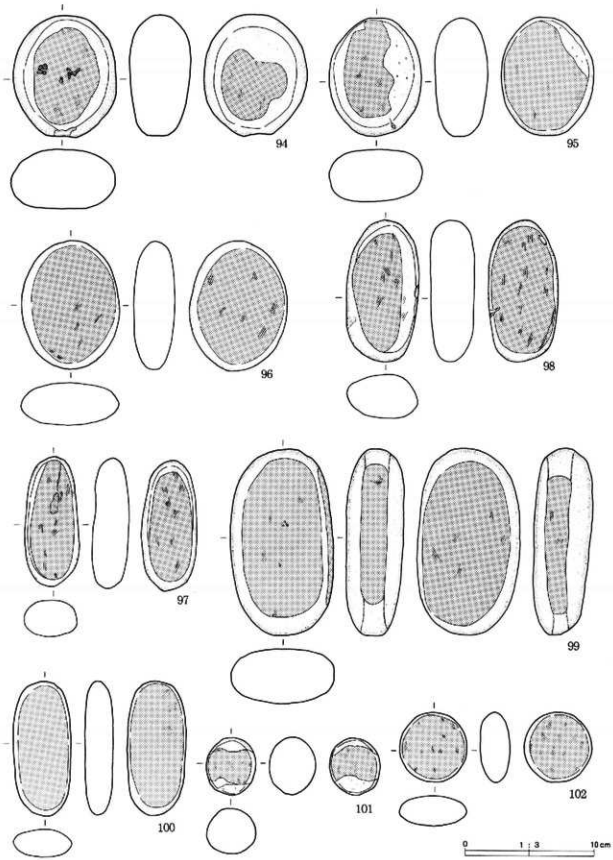


図14　遺構外出土遺物(5)

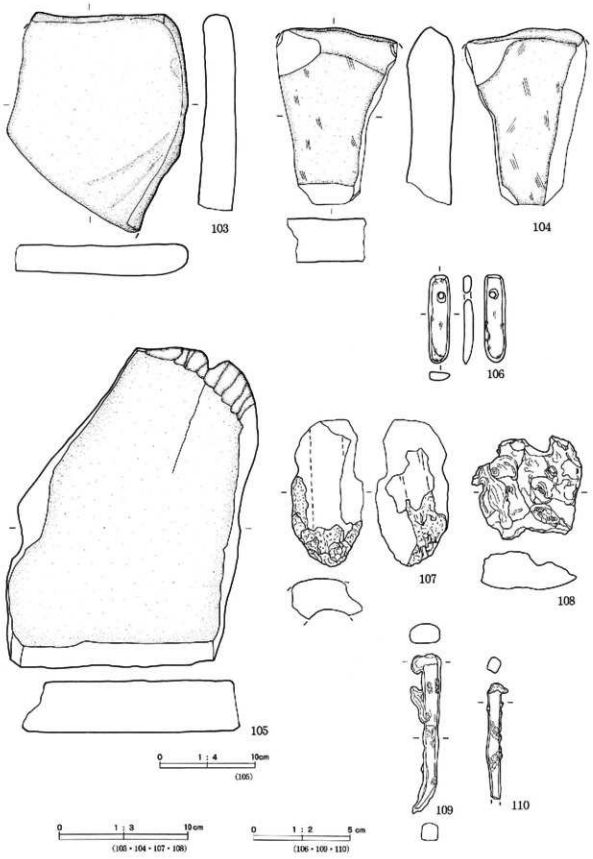


図15　遺構外出土遺物(6)

表3　遺構外出土遺物観察表（土器）

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	分類	図版	写真図版
6	F 4 区　III下～IV層上	深鉢	胴部	表裏条痕，刻みのある微隆帯，金雲母含	条痕	I	10	5
7	F 4 区　III下～IV層上	深鉢	胴部	表裏条痕，微隆帯，金雲母	条痕	I	10	5
8	F 4 区　III下～IV層上	深鉢	胴部	表裏条痕，刻みのある微隆帯，金雲母	条痕	I	10	5
9	F 4 区　III下～IV層上	深鉢	胴部	表裏条痕，山形沈線，金雲母含	条痕	I	10	6
10	F 4 区　III下～IV層上	深鉢	胴部	表裏条痕，沈線（円線）による幾何学文様？，金雲母含	条痕	I	10	6
11	F 4 区　II層上	深鉢	胴部	表裏条痕，沈線による幾何学文様，金雲母	条痕	I	10	6
12	F 4 区　II層下	深鉢	胴部	表裏条痕，金雲母	条痕	I	10	6
13	F 3 区　III層	深鉢	胴部	集合沈線文，金雲母	ミガキ	I	10	6
14	G 4 区　I層中～下	深鉢	胴部	結束羽状縄文，繊維含（多）	ナデ	II 1	10	6
15	F 2 区　III層上～中	深鉢	胴部	羽状縄文（0段多条－RL節り倒），繊維含	ナデ	II 1	10	6
16	E 3 区　III層	深鉢	胴部	羽状縄文，繊維含	ナデ	II 1	10	6
17	E 3 区　III層	深鉢	底部	羽状縄文（底部にも施文），繊維含（多）	ナデ	II 1	10	6
18	E 3 区　III層	深鉢	胴部	羽状縄文	ナデ	II 1	10	6
19	E 5 区　III層上	深鉢	胴部	羽状縄文	ナデ	II 1	10	6
20	G 3 区　II層上～中	深鉢	胴部	組縄縄文（複節），繊維含	ナデ	II 2	10	6
21	F 3 区　III層上	深鉢	胴部	組縄縄文，繊維含	ナデ	II 2	10	7
22	E 3 区　II下～III層上	深鉢	胴部	組縄縄文，繊維含（多）	ナデ	II 2	10	7
23	E 4 区　III層	深鉢	胴部	組縄縄文，繊維含（多）	ナデ	II 2	10	7
24	D 4 区　III層上	深鉢	胴部	組縄縄文，繊維含	ナデ	II 2	10	7
25	E 5 区　III層下	深鉢	胴部	組縄縄文，繊維含	ナデ	II 2	10	7
26	G 5 区　III層下	深鉢	胴部	組縄縄文（複節），繊維含	ナデ	II 2	10	7
27	E 3 区　撹乱部	深鉢	胴部	組縄縄文，繊維含	ナデ	II 2	10	7
28	F 3 区　III層	深鉢	胴部	組縄縄文（複節）	ナデ	II 2	10	7
29	E 5 区　III層下	深鉢	胴部	組縄縄文（複節），繊維含	ナデ	II 2	10	7
30	F 3 区　II層下	深鉢	胴部	組縄縄文（複節），金雲母	ナデ	II 2	10	7
31	F 3 区　III層上	深鉢	口縁部	LR縄文，繊維含	ナデ	II 2	10	7
32	E 3 区　III層	深鉢	胴部	RL縄文（結び方・0段多条），繊維含	ナデ	II 3	10	7
33	E 3 区　III層	深鉢	胴部	LR縄文，繊維含	ナデ	II 3	10	7
34	F 3 区　II層	深鉢	口縁部	LR縄文，繊維含	ナデ	II 3	10	7
35	F 2 区　II層	深鉢	胴部	無文，ナデ，繊維含	ナデ	II 4	10	7
36	E 4 区　II下～III層	深鉢	口縁部	波状口縁，撚糸圧痕	ミガキ	III 1 a	11	8
37	E 5 区　III層上	深鉢	ロ～胴	撚糸圧痕，LR縄文	ミガキ	III 1 a	11	8
38	E 5 区　II下～III層	深鉢	口縁部	撚糸圧痕，LR縄文	ナデ？	III 1 a	11	8
39	E 5 区　II下～III層	深鉢	口縁部	撚糸圧痕	ナデ	III 1 a	11	8
40	E 5 区　III層下	深鉢	口縁部	撚糸圧痕，無節L	ナデ	III 1 a	11	8
41	E 5 区　II下～III層	深鉢	口縁部	撚糸圧痕，LR縄文	ナデ	III 1 a	11	8
42	E 4 区　III層	深鉢	胴部	撚糸圧痕，隆帯，LR縄文，小雲多い	ナデ	III 1 a	11	8
43	E 3 区　III層上	深鉢	口縁部	沈線（凹線），山形隆沈線刺目，LR縄文	ミガキ	III 1 b	11	8
44	F 4 区　II層下	深鉢	口縁部	口唇部上面刻み，隆帯上に半截竹管状の刺突，沈線（凹線）	ナデ	III 1 b	11	8
45	G 4 区　I層中～下	深鉢	口縁部	口縁部肥厚，沈線，無節L	ミガキ	III 1 b	11	8
46	E 5 区　III層上	深鉢	口縁部	沈線，刺目痕	ミガキ	III 1 b	11	8
47	E 5 区　III上層	深鉢	口縁部	複合口縁，刺突？	ナデ	III 1 b	11	8
48	F 2 区　II下～III層	深鉢	胴部	平行沈線	ミガキ	III 1 b	11	8
49	E 4 区　III層上	深鉢	口縁部	口縁部折り返し？，LR縄文	ナデ	III 1 c	11	8
50	E 6 区　II下～III層上	深鉢	胴部	微隆帯，LR縄文	ナデ	III 1 c	11	8
51	E 3 区　III層上	深鉢	口縁部	波状口縁，沈線による楕円状区画，RL縄文	ミガキ	III 2 a	11	8
52	E 2 区　III層	深鉢	胴部	楕円状沈線区画，LR縄文	ナデ	III 2 a	11	8
53	F 3 区　II層下	深鉢	胴部	沈線区画？，RL縄文	ミガキ	III 2 b	11	8
54	E 4 区　III層上	深鉢	胴部	沈線区画，RL縄文	ミガキ	III 2 b	11	8
55	E 3 区　II下～III層	深鉢	胴部	沈線区画，RL縄文	ミガキ	III 2 b	11	8
56	E 5 区　III層	深鉢	口縁部	刺目（幅広）2列，金雲母含	ミガキ	IV	11	9
57	E 3 区　III層	深鉢	胴部	刺目，金雲母含	ナデ	IV	11	9
58	H 2 区　III層上	鉢	口縁部	無文，コゲ	ミガキ	IV	11	9
59	E 3 区　II下～III層	深鉢	胴部	羽状縄文	ミガキ	IV	11	9

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	分類	図版	写真図版
60	E 5区　II下～III層	深鉢	胴部	沈線，RL縄文	ナデ	V	11	9
61	E 5区　III層下	深鉢	頸部	平行沈線，RL縄文（0段多条）	ミガキ	V	11	9
62	E 6区　II下～III層	深鉢	胴部	平行沈線，RL縄文	ナデ	V	11	9
63	F 5区　III層下	深鉢	胴部	結束体圧痕？	ナデ	VI	11	9
64	E 5区　II下～III層	深鉢	口縁部	RL縄文（0段多条）	ミガキ	VI	11	9
65	E 3区　III層上	深鉢	口縁部	RL縄文（0段多条）	ミガキ	VI	11	9
66	G 3区　III層上～中	深鉢	口縁部	RL縄文	ナデ	VI	11	9
67	E 6区　III層上	深鉢	口～胴	LR縄文（条の痕跡）	ミガキ	VI	11	9
68	F 3区　III層下	深鉢	胴部	RL縄文	ナデ	VI	11	9
69	F 3区　III層	鉢	胴部	LR縄文	ナデ	VI	11	9
70	E 3区　II下～III層	深鉢	口縁部	LR縄文	ミガキ	VI	11	9
71	E 3区　II下～III層	深鉢	口縁部	RL縄文	ミガキ	VI	11	9
72	E 5区　III層下	深鉢	口縁部	LR縄文（異条か？），金雲母	ナデ	VI	11	9
73	E 5区　III層下	深鉢	口縁部	LR縄文？	ミガキ	VI	11	9
74	E 3区　III層中～下	深鉢	口縁部	RLR縄文	ナデ	VI	11	9
75	＞レンチ9　層位不明	深鉢	口縁部	RLR縄文	ナデ	VI	11	9
76	E 3区　III層上	深鉢	胴部	RLR縄文	ナデ	VI	11	9

表4　遺構外出土遺物観察表（石器）

番号	器種	出土地点・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	産地	図版	写真図版
77	石鏃	G 4区　I層	2.5	1.4	0.5	2.3	赤色頁岩	北上山地	12	10
78	石鏃	D 5区　II層上	2.6	1.7	0.6	(2.3)	頁岩	北上山地	12	10
79	石鏃	E 5区　II層下～III層	2.3	1.4	0.2	(0.7)	頁岩	北上山地	12	10
80	石鏃	E 2区　III層上	2.1	1.8	0.5	1.8	真岩	北上山地	12	10
81	石鏃	F 4区　III層上	5.5	2.5	0.6	7.9	頁岩	北上山地	12	10
82	不定形石器	F 4区　II層下～III層	4.1	6.1	0.9	22.3	真岩	北上山地	12	10
83	不定形石器	F 3区　III層	4.4	2.9	0.9	10.4	頁岩	北上山地	12	10
84	不定形石器	G 3区　III層	5.6	3.8	1.0	27.0	真岩	北上山地	12	10
85	不定形石器	E 4区　III層	4.8	6.2	1.3	30.3	頁岩	北上山地	12	10
86	不定形石器	E 4区　III層上	3.2	2.1	1.0	9.6	水晶	北上山地	12	10
87	石斧	F 2区　II層下～III層	7.9	4.9	2.5	(128.6)	頁岩	北上山地	13	10
88	凹石	F 3区　III層下	12.3	6.0	3.0	339.7	閃緑岩	北上山地	13	10
89	凹石	F 3区　III層上	13.8	7.1	2.4	305.6	砂岩	北上山地	13	10
90	敲石	地点・層位不明	13.3	6.2	3.2	389.7	閃緑岩（細粒）	北上山地	13	10
91	磨石	E 3区　III層	10.4	9.2	5.6	675.4	アプライト	北上山地	13	11
92	磨石	E 4区　III層上	11.4	9.5	5.4	868.9	花崗斑岩	北上山地	13	11
93	磨石	D 3区　III層	9.2	8.0	5.0	498.4	花崗斑岩	北上山地	13	11
94	磨石	地点・層位不明	9.6	8.1	4.7	586.0	花崗斑岩	北上山地	14	11
95	磨石	G 3区　II層上	9.8	7.2	4.1	363.6	輝沢岩	奥羽山脈	14	11
96	磨石	D 5区　層位不明	10.1	7.8	3.2	333.5	アプライト	北上山地	14	11
97	磨石	G 3区　I層	10.2	4.3	2.8	172.7	アプライト	北上山地	14	11
98	磨石	H 2区　I層	11.1	5.6	3.4	290.7	輝沢岩	奥羽山脈	14	11
99	磨石	G 2区　III層	14.7	8.1	4.4	821.2	アプライト	北上山地	14	11
100	磨石	E 5区　III層下	10.6	4.6	2.2	187.3	閃緑岩（細粒）	北上山地	14	11
101	磨石	D 2区　III層	4.6	3.9	3.6	88.8	アプライト	北上山地	14	11
102	磨石	E 4区　II層下	5.5	5.2	2.4	104.9	アプライト	北上山地	14	11
103	石皿	C 6区　III層上	(17.2)	(13.1)	2.5	(772.2)	砂岩	北上山地	15	11
104	石皿	E 3区　II層下	(13.9)	(9.4)	3.3	(558.4)	流紋岩	浄キャ浜	15	12
105	台石	E 5区　III層上	34.1	26.2	5.5	7.8kg	流紋岩	浄土ヶ浜	15	12
106	石製垂飾品	E 5区　II～III層	5.7	1.1	0.5	4.9	滑石	北上山地	15	12

※ 数値の（　）は欠損値

Ⅵ　まとめ

1．遺構・遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡１棟、陥し穴状遺構１基、土坑１基、炉跡１基、焼土２基である。いずれも縄文時代の遺構と思われるが、竪穴住居跡・炉跡は中期中葉期（大木７ｂ～８ａ式期）に属し、土坑は遺構検出面から、早期に属する可能性がある。陥し穴状遺構と焼土２基については、詳細な時期は不明である。

本遺跡から出土した遺物の総量は、土器・石器類とも大コンテナ１箱弱である。この他には、鉄製品では角剣２点、フイゴの羽口１点、鉄滓数点、陶磁器が10点あまり出土した。

土器では、縄文時代早期後葉・前期初頭～末葉・後期中葉・晩期に属するものが出土している。中でも早期後葉の表裏条痕文を有する土器群、前期初頭～前葉の羽状縄文・組紐縄文を有する土器群など、本県で比較的資料の少ない時期の遺物がわずかながら得られた。宮古市内でこれらの上器が出土した過去の調査事例としては、前者が笹沢Ⅰ遺跡、後者が千鶏遺跡・崎山貝塚・長根Ⅰ遺跡などが挙げられる。以下に、この２つの土器群について記述する。

笹沢Ⅰ遺跡の竪穴状遺構から出土した表裏条痕文土器を実見したが、本遺跡出土の第Ⅰ群土器とは胎土・焼成・条痕の単位等に大きな差が認められた。笹沢Ⅰ遺跡出土のものは、いずれも焼成が悪く胎土に砂粒が多く含まれるのに対して、本遺跡のものは胎土に雲母の混入が目立ち、かつ焼成も良好である。条痕文自体にもその幅や施文の方向等に明瞭な違いが観察され、同じ条痕文を有する土器であるが、両者には若干の時期差があるものと思われた。この２つの条痕文土器群の時期的な関係については、現段階では不明と言わざるを得ない。今後の沿岸地区の早期資料の追加を待って再検討したいと思う。

また同時に、千鶏遺跡の前期初頭～前葉の土器群も実見する事ができたが、ここで本遺跡出土の羽状縄文と組紐縄文を有する土器について、千鶏遺跡の例と比較しながら簡単に述べてみたい。

千鶏遺跡では、前期初頭～前半の土器群がまとまって確認され、東北南半の上川名Ⅱ式、北半の長七谷地Ⅲ群併行の一群と、口縁部文様帯の欠如などの特徴から上川名Ⅱ式から分離され、それに後続する型式とした桂島式（林1960）と東北北半の早稲田６類併行の一群が層位的に分かれるとし、前者を千鶏Ⅰ式、後者を千鶏Ⅱ式と設定した（鎌田1989）。前述のとおり、本分類では前期初頭の一群（第Ⅱ群土器）を、概ね長七谷地Ⅲ群～早稲田６類に相当するものとし、中でも羽状縄文については、結束が見られずまたその施文単位の幅が狭いことから、桂島式に類似するものとした。また、組紐縄文については早稲田６類に比定させた。しかし、いずれも口縁部資料がなくかつ資料数も少ないため、これらを詳細に検討する材料に乏しい。今のところ、桂島式が上川名Ⅱ式とは分離されないという見解が主流となっており、第Ⅱ群１類（羽状縄文）土器は、敢えて「桂島式に類似する」という表現にした。同群２類（組紐縄文）上器については、千鶏遺跡では口縁部形態において、①口唇部が平坦あるいは内削ぎに整形されるもの ②薄い口唇部がわずかに外反するもの という２つの特徴が見られるようであるが、既述の理由から本分類上は細分が不可能であった。

このことから、本遺跡から出土した縄文時代前期初頭～前葉の上器群は、長七谷地Ⅲ群～早稲田６類相当と幅を持たせていたが、むしろ早稲田６類相当と限定し、その内容は千鶏Ⅱ式に最も近いとするのが適切であったかもしれない。

2．おわりに

調査区内の地山面（風化花崗岩層）には、大きな地層のうねりと擂り鉢状の凹地が数カ所で認められたが、これらの凹地に安家火山灰が堆積している部分があった。これらが埋まりきってからは比較的緩やかな斜面となり、沢も近くにあって居住域としては良好な場所と思われたが、遺構はあまり存在しなかった。集落の中心は、もう少し沢から離れた標高の高い西側の斜面部か、または国道45号線（旧沢跡）を挟んだ北東側の緩斜面にあることが予想された。

なお、調査区西端の沼地部分は１ｍ掘り下げた時点で湧水し、そこからは遺構・遺物ともいっさい確認されなかった。

＜引用・参考文献＞

岩手大学考古学研究会（1978）：『岩手県盛岡市大館町遺跡』盛岡市教育委員会

大湯卓二ほか　（1980）：『長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書－昭和53年度第２次』青森県教育委員会

小田野哲憲・高橋義介（1991）：『上村貝塚発掘調査報告書』岩埋文報告書第158集(財)岩文振

鎌田祐二　（1992）：『大付遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書35 宮古市教育委員会

工藤　大　（1998）：「いわゆる羽状縄文について」『リングサイド』ＰＰＣ岡好会

熊谷常正　（1983）：「岩手県における縄文時代前期十腰群の成立」『岩手県立博物館研究報告』第１号 岩手県立博物館

熊谷常正　（1983）：「岩手県の早期後半から前期初頭の土器群について」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』 第４回縄文文化検討会シンポジュウム資料

鈴鹿良一ほか　（1973）：『崎山弁天遺跡』 大槌町教育委員会

高橋重敦子ほか　（1987）：『仏沢Ⅲ遺跡』 滝沢村文化財調査報告書第５集 滝沢村教育委員会

高橋重貴了　（1992）：「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』

高橋雷太郎・鎌田祐二（1989）：『千鶴遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書16 宮古市教育委員会

千葉孝雄　（1996）：『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第238集(財)岩文振

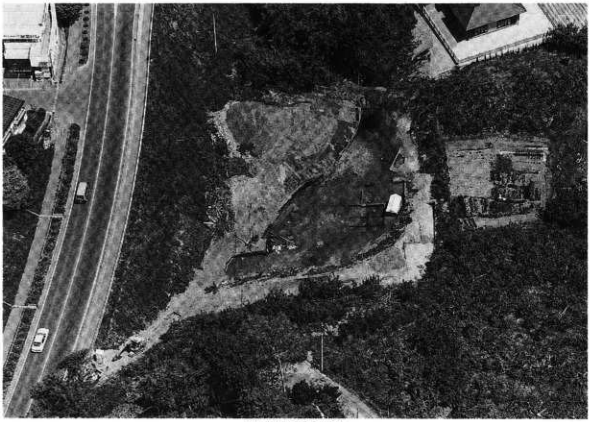
似内啓邦ほか　（1995）：『上平遺跡群－猪去館・上平Ⅱ遺跡』 盛岡市教育委員会

林　謙作　（1960）：「宮城県袖島貝塚出土の前期縄文式土器群」『考古学雑誌46－３』

三浦圭介ほか　（1980）：『表館(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集　青森県教育委員会

三宅徹也ほか　（1984）：『売場遺跡発掘調査報告書（第３次・第４次）　大タルミ遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集　青森県教育委員会

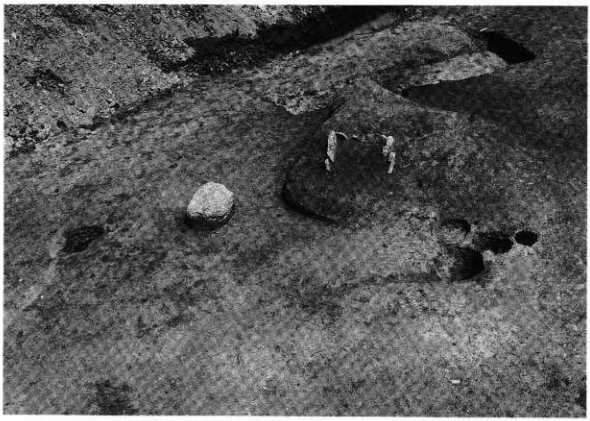
写 真 図 版



遺跡全景（西から）

調査区全景（北東から）

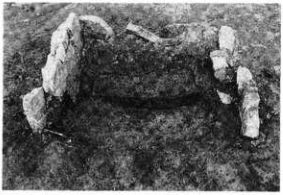
写真図版1　遺跡全景



全　景

炉　検出状況

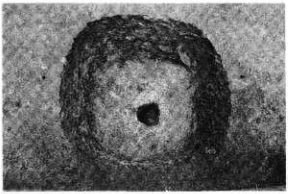
柱穴　埋土



炉　断ち割り

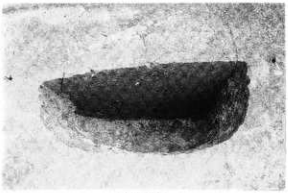
遺物出土状況

写真図版２　第１号住居跡

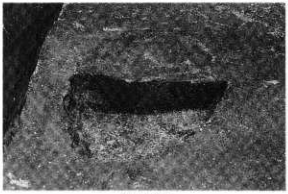


第１号陥し穴状遺構

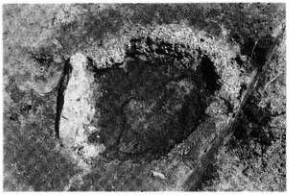
第１号土坑



埋土断面



埋土断面

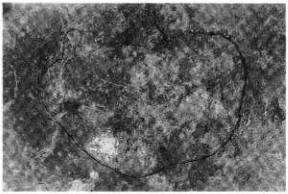


第１号炉跡

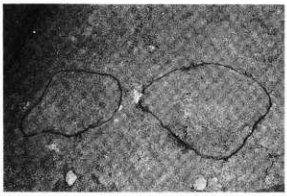
断ち割り断面

基本層序（Ｃ５区）

写真図版３　陥し穴・土坑・炉跡



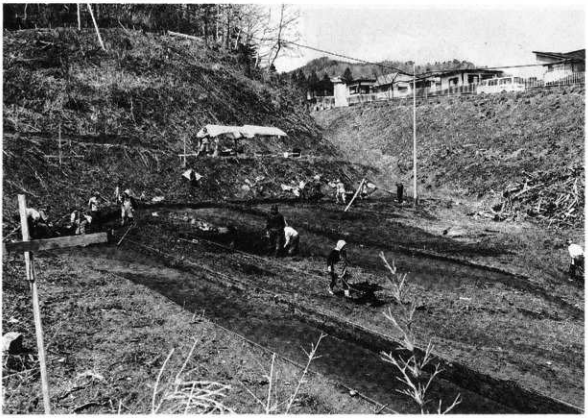
第１号焼土



第２号焼土

断ち割り断面

断ち割り断面



作業風景（右上は国道45号線）

写真図版４　焼土・作業風景

1

2

3

4

5

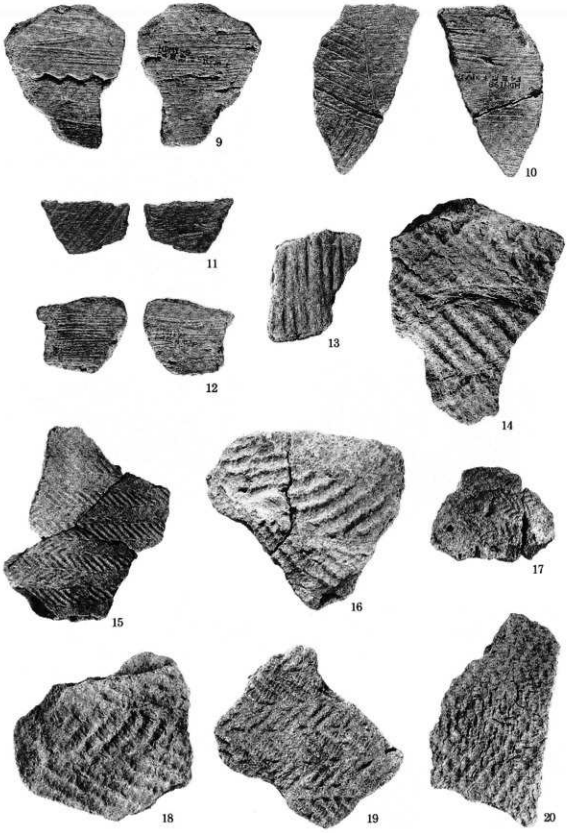
〈第1号住居跡〉

6

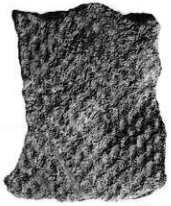
7

8

写真図版5　遺構内・遺構外出土遺物(1)

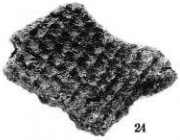


写真図版6　遺構外出土遺物(2)


21

22

23


24

25

26

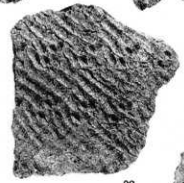
27

28

29

30

31

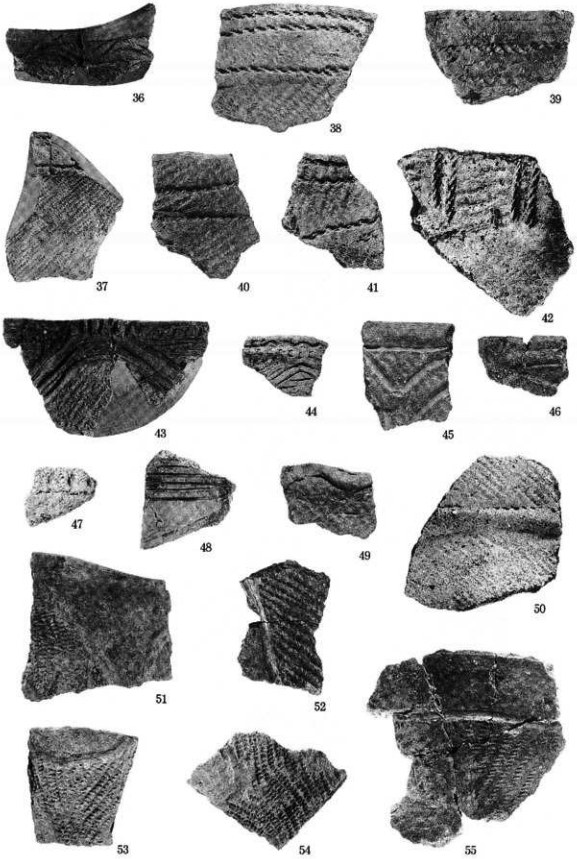

32

33

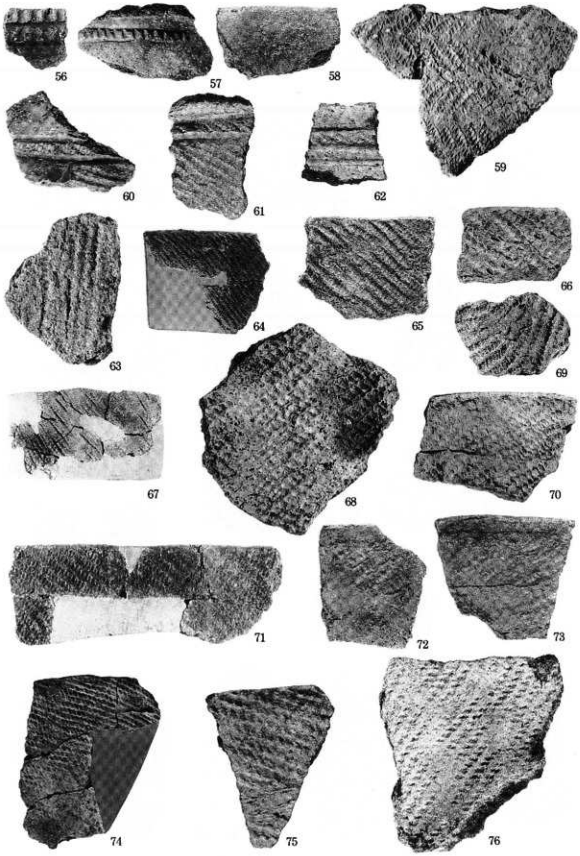
34

35

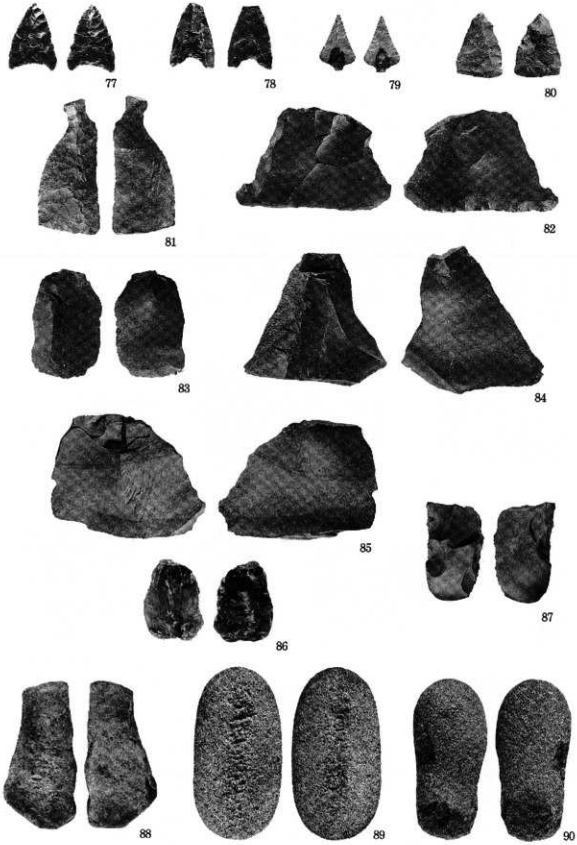
写真図版7　遺構外出土遺物(3)



写真図版８　遺構外出土遺物(4)

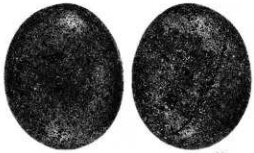


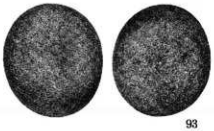
写真図版９　遺構外出土遺物(5)



写真図版10　遺構外出土遺物(6)

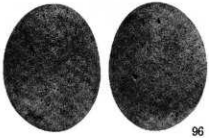
91


92


93

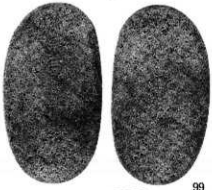
94

95


96

97

98


99

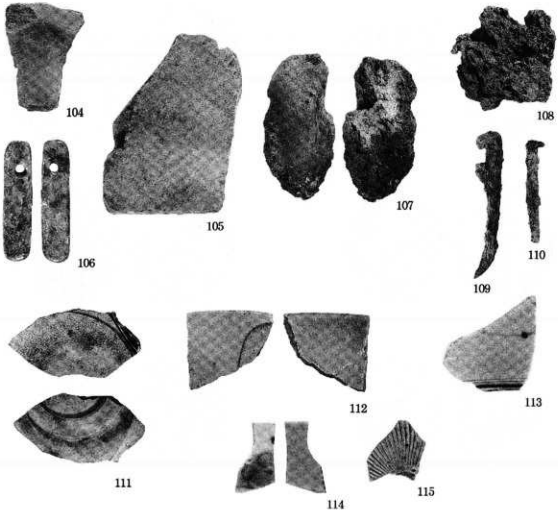
100

101

102

103

写真図版11　遺構外出土遺物(7)



写真図版12　遺構外出土遺物(8)

報告書抄録

ふりがな	ひのでちょういちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	日の出町Ⅰ遺跡発掘調査報告書
副書名	職員宿舎建設事業関連発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第315集
編著者名	濱田　宏・玉山健一
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL 019－638－9001
発行年月日	西暦1999年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
日の出町Ⅰ遺跡 （ひのでちょういち いせき）	岩手県宮古市 日の出町56番4 （ひのでちょう ばん） ほか			39度 39分 18秒	141度 57分 13秒	1998.4.8～ 1998.5.22	1,300㎡	職員宿舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日の出町Ⅰ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　1棟 土坑類　1棟 陥し穴状遺構　1基 炉跡　1基 焼土　2基	縄文土器（早～中期） 石器（石鏃・石匙・磨石・凹石ほか） 石製垂飾品 フイゴの羽口 鉄滓 鉄製品（角釘）	石製垂飾品出土

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	佐藤　基
副所長	伊藤直司
〔管理課〕	
課長	川浪清徳
主査	立花多加志
主事	日影睦夫
〔調査第一課〕	
課長	小田野哲憲
課長補佐	佐々木清文
主任文化財専門調査員	酒井宗孝
〃	小山内　透
文化財専門調査員	中田　迪
〃	吉田　充
〃	鎌田　勉
〃	小笠原健一郎
〃	鳥居達人
〃	濱田　宏
〃	佐々木進悦
〃	安藤由紀夫
〃	木戸口俊子
〃	小野寺正之
〃	阿部勝則
〃	千葉正彦
〃	羽柴直人
〃	高木　晃
〃	佐藤淳一
〃	菅原靖男
〃	半澤武彦
〃	朝倉雄大
〃	菊池貴広
〃	村上　拓
〃	本多準一郎
〃	中村直美
〃	丸山浩治
期限付専門職員	佐藤綾子
〃	平　めぐみ
〃	藤原賢徳
〃	江藤敦
〃	小林弘卓
〃	小原広幸
嘱託	藤島恵子
〃	新田トヨ
〃	佐々木光恵
〔調査第二課〕	
課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
主任文化財専門調査員	高橋義介
文化財専門調査員	古舘貞身
〃	阿部眞澄
〃	松尾芳幸
〃	小原眞一
〃	工藤　徹
〃	前田稔
〃	金子佐知子
〃	岩渕計
〃	早坂悟
〃	佐々木務
〃	晴山雅光
〃	星雅之
〃	佐々木琢
〃	杉沢昭太郎
〃	溜浩二郎
〃	北村忠昭
〃	金子昭彦
期限付専門職員	鈴木聡
〃	平澤里香
〃	布谷義彦
〃	山口俊規
〃	熊谷佳恵
〃	吉田里和
〃	北田勲
〃	吉川徹

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第315集

日の出町Ⅰ遺跡発掘調査報告書

職員宿舎建設事業関連発掘調査

印刷　平成11年11月25日
発行　平成11年11月30日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11-185
TEL (019) 638 9001
FAX (019) 638－8563
印刷　(株)白ゆり
〒020-0122　盛岡市みたけ6丁目1 50
TEL (019) 643－6060

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999